

巻頭言 北海道南洲会会長 工藤 勉

今から約80年前、徳富蘇峰という著名な言論人が講演会でこう述べました。

「南洲翁(西郷隆盛先生)を慕う心が日本国民にある間は大丈夫。しかし、これが無くなる時は日本が滅びるとき」と。今の日本はどうでしょうか？

南洲翁の偉業、精神を理解している日本人はわずかではないでしょうか？それが原因か否かは断言できませんが、今の日本は日々、理解不能な事件がマスコミを賑わせております。

家族の関係崩壊、教育崩壊、政治は国民の信を失い、経済力は衰退の一途を辿っています。

北海道南洲会は、今の時代であるからこそ南洲翁の真実の姿を知ると同時に、その教えを探求することで、かつての誇り高い日本(北海道)を取り戻すことを目的に活動を開始しました。

本会において、崇高な志を持った仲間同士による切磋琢磨の成果を表現する媒体として、「克己」が本会の更なる社会的存在意義を増幅する役割を果たすことを望んでやみません。

南洲翁をはじめ明治維新の英雄を輩出した原動力は、薩摩(鹿児島)独自の教育システムの郷中教育でした。その郷中教育の根幹をなしていた三つの訓は「嘘をつくな」、「弱い者をいじめるな」、「負けるな」です。

「克己」はこの三訓が全て自分に厳しさを課すという解釈のもと、本会に相応しい名称と考え命名された次第であります。

「北海道南洲会」設立趣意書

日本国民の多くがその名を認識している歴史上の人物の代表的存在が西郷南洲(隆盛)翁であるということとは否定できない事実であろう。

東京上野公園にそびえ立っている南洲翁像の存在は、翁の名それ自体を広める効果を発揮してはいるが、南洲翁の具体的な功績を知る人はごくわずかであり、それどころか虚実入り混じった南洲翁の人物像が人口に膾炙しているのが現状である。

いわゆる「征韓論」、さらには南洲翁にとって生涯最大の悲劇である「西南戦争」に関しても表層部分のみが喧伝されているに過ぎず、その真実はあたかも封印されているがごとくである。

例えば、教科書に登場する南洲翁の顔写真ですら実物とは異なっている。いや、この写真でさえ本当は絵なのである。明治維新樹立の立役者たる南洲翁は、その功績の大きさと裏腹に写真一枚すら残してはいない。

無私無欲の生き方を貫き通した南洲翁の精神は気高く、今日もなお、燦然と光り輝いており、人生の亀鑑、精神の支柱となって私たちを導いてくれるのである。

北海道南洲会は、会員相互が、西郷南洲翁の「敬天愛人」に代表される精神、生き方、そして功績を正しく学び、生きていく上での道標とするとともに、ひいては社会に貢献する人材を輩出することを目的として設立するものである。

記

1 本会の目的及び主な活動内容

本会は、会員が西郷南洲翁の精神を学び、人生の道標とすることを目的に、以下の活動を行う。

- (1) 会員による定期勉強会(「西郷南洲遺訓」などの資料を活用)
- (2) テマを設定しての講演会開催及び他団体との共催イベント開催
- (3) 活動成果発表としての広報誌発行
- (4) 西郷南洲翁ゆかりの地訪問

2 本会の運営方針

- (1) 不偏不党の立場に立ち、特定の宗教・団体の利害に左右されない活動をする。
- (2) 北海道を基にして活動をする。
- (3) 原則的に利益追求を目的としない。

北海道南洲会設立総会を開催

平成 21 年 9 月 17 日(木)。記念すべき「北海道南洲会」設立総会が開催された。

当日の参集者は 4 名と少ない人数ではあったが、運動方針等について、活発な意見交換を行った。

その結果、規約について検討課題が見つかり、次回の会合において、この課題について再度検討することとなった。

なお、席上で、新会計年度までの間の本会役員を選出し、当面の間、以下のメンバーで役員会を構成することとした。次回会合は、10 月 16 日(金) 18:30 の予定。

会 長	工藤 勉
副 会 長	高木良一
幹 事 長	吉 俊也
会計幹事	天沼宇雄



西郷南洲翁遺訓を学ぶ(第1回)

西郷南洲翁遺訓は、庄内藩(現山形県鶴岡市、酒田市の地域)有志によって編纂され、明治二十三年に出版されたものです。

庄内藩は、幕末には江戸薩摩藩邸を焼き打ちにし、戊辰戦争にあっては、旧幕府軍として新政府軍と戦った経緯があり、新政府軍に降伏した後は、その報復を覚悟したのですが、新政府軍参謀黒田清隆は、庄内藩に対して、極めて寛大、かつ武士道に則った処置をとりました。

それが西郷南洲翁の指示によるものであることを知った庄内藩は、仇敵であったにも関わらず南洲翁に対する尊敬の念を深め、南洲翁に学ぼうと、翁の言葉を一冊の書物にまとめたのです。

南洲翁は一冊の著書も残していませんが、この南洲翁遺訓に残された翁の言葉は、時代を経ても光を失うことなく、いや、むしろこの混沌とした現代にこそ、光り輝いて、暗闇を照らすものだと言えるでしょう。

北海道南洲会は、翁の遺訓を通して、その精神を学んでいきます

遺訓 一

廟堂^{びょうどう}に立ちて大政を為すは天道を行うものなれば、些^ちとも私を挟みては済まぬもの也。

いかにも心を公平に操り、正道を踏み、広く賢人を選挙し、能くその職に任ゆる人を挙げて政柄を執らしむるは、即ち天意也。それゆえ真に賢人と認むる以上は、直ちに我が職を譲るならでは叶わぬものぞ。故に何程国家に勲勞^{くんろう}ある共、その職に任えぬ人を官職を以て賞するは善からぬことの第一也。

官はその人を選びてこれを授け、功ある者には俸禄^{ほうろく}を以て賞し、これを愛し置くものぞと申さるるに付き、然らば尚書(経書)仲^{ちゆう}き之^こ語「徳さかんなる官をさかんにし、功さかんなるは賞をさかんにする」とこれあり、徳と官と相配^{あいはい}し、功と賞と相対するはこの義にて候いしやと請問せしに、翁欣然としその通りぞと申されき。

国政の中心に立って仕事をするという事は、これは人の仕事ではなく天が与えた仕事を行うのだと思わなければならない。

政治とは、世の中全体を見渡し、万民の暮らしを支えていかなければならないものであり、そこに、自分の好悪の感情だとか損得の計算が入ってはならない。政治には私心が入ってはならないのだ。私心を捨てて取り組まなければならないから天が与えた仕事だというのである。

この考えは、国政だけに限らず、組織の指導者としての心構えにも相通じる。

指導者は、常に心を公平に保ち、私心を捨てて、公平に周りの人間を見渡し、本当に力量のある人を見出したなら、その人に的確な地位を与え、その実力を発揮させなければならない。それが天の意思なのだ。

もしも、その人が自分よりも、組織の発展に役立ち、指導者としての実力も上であると判断した場合は、自分の地位を直ちにその人に譲るようではなければならない。

しかし、組織の中に大きな功績を上げた人がいたからといって、その人に褒美として地位を与えることは絶対にやってはいけないことだ。

一つの仕事で功績を上げたことと、高い地位の職務を遂行できる力量があるかどうかとは、別の話なのだ。今は功績がなくとも大きな力量を持っている人がいる。公平な目でそういう人を見出して地位を与えて、実力を発揮させなければならない。

功績のあった人には、金銭を与えて酬いばいいのだ。金銭を与えることはその場限りのことだから、その人によって、後々組織が悪い影響を受けるかもしれないなどと心配する必要もなくなるからだ。

このように南洲翁がおっしゃったので、翁に聞いてみました。

「先生のお話は、中国の古典の尚書にある『徳望の大きな人は高い地位に就いて、大きな功績のあった人は金持ちになる』ということに通じるのでしょうか」

すると、南洲翁は、にっこりとほほ笑んで、「そうだ、そのとおりだ」とうなずいたのです。

西郷南洲翁ゆかりの人々(その1) 薩摩藩第11代藩主 島津斉彬



島津斉彬(しまずなりあきら)。薩摩藩第11代藩主と云うより最近では「篤姫」の育父と云った方が分かりやすいかもしれない。斉彬は、1809年(文化6)江戸薩摩藩邸で第10代藩主斉興(なりおき)の世子(世継ぎ)として生まれた。

斉彬は、先取気鋭の性格で、曾祖父である第8代藩主島津重豪(しまずひでしげ)の影響を受け、早くから西洋文化に大きな関心を抱いて研鑽し、当時の日本を取り巻く諸外国の事情にも明るく、世間から「三百諸侯随一の世子」の呼び声が高かった。しかし、曾祖父重豪は、西洋文化に造詣が深く、藩政を開放的にした名君と云われる一方で、公金を湯水の如く使い、藩財政を困窮に追い込んでいた。

このため、藩主斉興は、このような状況になることを危惧し、斉彬が40歳を過ぎても家督を譲らなかった。この間、斉興の側室お由羅(おゆら)の方の一派は、お由羅の方の子で、斉彬の異母弟に当る島津久光を藩主に擁立しようと画策した。

一方では斉彬擁立派が、暗に行動を計画したが、これが事前に漏れて藩主斉興の怒りをかい、首謀者10数名が切腹、連座した50名が遠島、謹慎に処せられた。

この事件をお由羅騒動(高崎崩れ)と云う。

斉彬派の家臣数名が必死の覚悟で脱藩して、重豪の子の福岡藩主黒田長溥に救いを求め、長溥の仲介で、幕府老中阿部正弘、伊予宇和島藩主伊達宗城らが事態収拾に努め、1851年(嘉永4)藩主斉興が隠居し、島津斉彬が、ついに薩摩藩第11代藩主の座に就いた。

藩主となった斉彬は、薩摩藩を西洋なみの産業国家に作り上げようと、水力発電所の建設に始まり、反射炉・溶鉱炉の建設、地雷・水雷、ガラス、ガス灯の製造などなど、数多くの殖産事業を興した。

1853年(嘉永6)アメリカのペリーが艦隊を率いて来航し、徳川幕府にライフル銃二挺を献上したときには、斉彬は、幕閣に「是非、その珍しいものを拝見したい」と云って、そのうちの二挺を借り受けると、一晩でそれを分解して図面に写し取った。そして、薩摩に帰国後、藩の工場とも云える集成館に「これを三千挺作れ」と命じ、集成館では、実際にこれを製造したのだから、当時の日本の技術水準を考えれば、その

技術力は驚異的と云わざるを得ない。

そして、1854年(安政元)には、西洋式軍艦昇平丸を建造し、徳川幕府に献上したが、このとき、斉彬が、日の丸を日本船章にするよう献策して、幕府に採用され、以後、日の丸は日本の国旗となっていく。

斉彬は、当然ながら、その当時流行の攘夷論者ではなかった。重臣に対して、常にこう語っていたと云う。「鎖国を上策と考えるな、日本国を唯一の世界を思うのは大間違いだ。外国とは、大いに交際も貿易もすべきであって、その交際の精神は、平和親善でなくてはならない。しかし、そのためには国防を盛んにし、外国から侮辱を受けぬように断固たる態度を取らなければ、国の独立を失ってしまうぞ」

南洲翁は27歳のとき、この藩主島津斉彬に見出され、斉彬の江戸参勤に際して、中御小姓・定御共・江戸詰(ちゅうおこしょう・じょうおとも・えどづめ)に任せられ、以後、庭方役となり、当代一の開明派大名である斉彬から直接教えを受けていくこととなる。

南洲翁にとって、藩主斉彬は、終生の師であり、そして、神とも崇める存在であった。

西郷南洲翁の生涯を辿る(その1)

西郷南洲翁は、1827年(文政10)鹿児島城下の下加納屋町山之口馬場で、父吉兵衛、母満佐(マサ)の長男として生まれた。幼名は小吉、長じて隆永、隆盛と名乗り、通称は吉之助。南洲は、その雅号である。西郷家の家格は、「御小姓与(おこしょうぐみ)」で、士分では、下から二番目の身分の下級藩士であった。

12歳のとき、喧嘩で右肘を負傷し、完全に右肘を曲げることができなくなったため、このときから武術をあきらめて、学問に励むようになった。

17歳で、藩の郡方書役助(こおりかたかきやくたすけ)に任用され、郡奉行迫田太次右衛門配下に就く。当時の薩摩藩では、武士の子弟がある程度の年齢になると、家計の助けになるように小さな役目に就ける慣習があり、当時の武士人口は、全国平均で一割にも満たないという世の中で、薩摩藩のみは、三割とも四割とも云う武士人口を抱えていた特殊事情によるものだった。これは、この武士階級の生活を支えなければならぬ藩内の農民の暮らしは、当然に過酷なものだったと想像するに難くはない。

郡方書役助とは、農政をつかさどる役人の補助で、藩の郡方は、年貢(税)の徴収等も行っていたので、藩内をくまなく出張しなければならぬ役目であった。

南洲翁が、任用されたときの郡奉行迫田太次右衛門は、城下でも有名な気骨のある武士として知られていたが、不作の年に例年並みの年貢を取り立てよと藩が命じたのに憤慨し、「虫よ 虫よ いつふし草の根を断つな 断てばおのれも 共に枯れなん」(虫：藩官僚、いつふし草：稲(百姓))と、役所の門に大書し、郡奉行を辞職した。若き南洲翁は、この迫田に大きな影響を受け、迫田から学んだ農政に関する知識や経験が、後に建白書を通じて、藩主島津斉彬に見出される要因となる。

1849年(嘉永2)薩摩藩のお家騒動である「お由羅騒動」が起った。

藩主斉興は、世子斉彬より、庶子の島津久光の保守性を好んで、斉彬に家督を譲ろうとせず、これに不満を持つ一派が、「斉興隠居・斉彬擁立」へと行動を開始したが、これを知った斉興は激怒し、関係者に切腹、遠島などの重刑を科した。

南洲翁の父吉兵衛が御用人を勤めていた槍奉行の赤山靱負(あかやまゆきえ)は、藩の名門で当時28歳であったが、斉彬擁立派の主導者として切腹を命ぜられた一人だった。

赤山靱負の介錯をした吉兵衛は、鮮血に染まった赤山の片袖を自宅に持ち帰り、その悲壮なる最期を家人に語った。24歳だった南洲翁は、その片袖を拝して号泣し、終夜その片袖を抱き、赤山の志を継ぐことを固く心に誓ったのである。

1851年(嘉永4)斉彬は、藩主の座に着くと、藩の改革を図り、数多くの近代事業を手掛けるとともに、人材の発掘に努め、藩政について意見があれば意見書を提出するようにと、藩内に布告した。

この当時、南洲翁は、加治屋町郷中(郷中：ごじゅうと読み、町内の区画の意味)の二才頭(にせがしら：若手の指導者)を務めていたが、この布告を目にすると、早速多くの建白書を藩庁に提出した。

この建白書は、「御国(薩摩藩)ほど農政のみだれたるところ決して御座あるまじ。いかにして百姓の伸び立ち候期御座あるべきや・・・」で始まる激烈な文章だったと云う。

これが藩主斉彬の目に留まり、1854年(安政元)中御小姓・定御共・江戸詰を命ぜられ、やがて庭方役(にわかたやく)を拝命する。

この庭方役の職務は明らかではないが、当時、身分の低い藩士が藩主に拝謁するには、随分と面倒な手続きが必要だったため、南洲翁の将来性を見込んだ斉彬は、面倒な手続きを取らずに庭先で自由に会うことのできる庭方役に任命したとされている。

若き南洲翁は、藩主斉彬のこの格別の配慮にどれほど感激したことだろうか。

この日から、南洲翁は、藩主斉彬から、日本の政治情勢や諸外国の状況、さらには日本の政治的課題等々について、直接教えを受けていく。斉彬は、南洲翁を「やがては藩を背負って立つ人物」と見込んで、深い

愛情をもって、熱心に教育するのである。

こんな二人の関係を示すものとして、「斉彬公が西郷どんを呼んでお話をなさる時は、たばこ盆をおたたきになる音が違った」という話が残っている。

斉彬の薫陶を受けた南洲翁は、次第に諸藩にもその名を知られるようになっていく。

西郷南洲翁は、藩主島津斉彬によって、その人間が形作られ、そして、世に出されていったのだった。

北海道と南洲翁

南国鹿児島が輩出した偉人・西郷南洲翁と北海道の関連性についてこれまで語られることは殆どなかったであります。

戊辰戦争末期に函館（箱館）まで到着された事実がありますが、これも日本史通のごく一部にしか知られておりません。しかし、この時は鹿児島の後輩でもある黒田清隆に戦後処理を任せて数日で立ち去っているのです。

明治新政府において、実質のトップの地位に就いていた南洲翁は、生涯の師・島津斉彬公が唱えた「開拓論」を実現すべく活躍の場を北海道に求めていたのです。

明治5年7月、南洲翁は北海道に鎮台を置き自らが、総司令官として北海道に移住する意向を閣議に諮ったりもしました。

もちろん、当時の日本が危惧していたロシアの南下脅威に備える国家戦略の遂行の意図もあったことでしょう。

同時に南洲翁は、北海道にて農業を展開したいという強い願望も内包させていました。

北海道を「北の守護神」かつ「日本の食糧基地」にすべく、今から135年以上も前に構想を練っておられたことが想像できます。

南洲翁と北海道の間には、実のところ密接な関係が存在したのです。

結局、明治6年の政変（いわゆる征韓論）に破れ、下野した南洲翁は北の未開の地に渡ることなく郷里である南国鹿児島に戻ってしまいます。

しかし、南洲翁が北海道という地と、そこにおける自身の生活に大きな可能性と夢を見出していたことは事実であります。

「北海道南洲会」の発足は、南洲翁の見果てぬ夢に込めるといえるという観点からも、その存在意義は大きいものと確信してやみません。

（工藤 勉）

悠然とそびえる桜島。



鹿児島のシンボル。今も昔も鹿児島人に勇気を与えています。

西郷南洲翁生誕の地



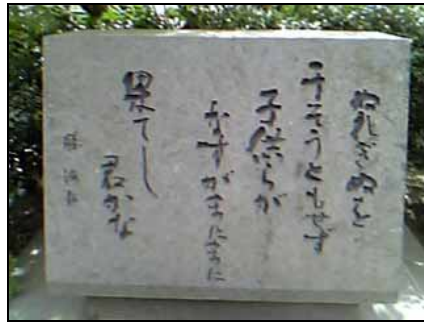
加治屋町に今も残されています。貧困にめげず南洲翁が人格形成した地。

南洲翁の墓前で



南洲翁の命日に本会の
発展を誓う

南洲神社にある石碑



盟友・勝海舟が南洲翁を偲び詠んだ詩
南洲翁の心境を忠実に表しています

武屋敷の像



南洲翁遺訓のきっかけとなった庄内
藩家老菅実秀と南洲翁対談の像

西郷南洲翁関係年表

西暦 年号	南洲翁年表	国内の動き	世界の動き
		1805：幕府が北辺警備を強化 1818：イギリス人コンドルが浦賀にきて通商を求める。 1821：伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図完成」。 1825：幕府が異国船打ち払い令を出す。 1833：天保の大飢饉が始まる。 1834：米価の高騰により全国で一揆や打ちこわしが勃発。 1837：大塩平八郎の乱 1838：緒方洪庵が大阪に適々斎塾を開く。 1842：水野忠邦が天保改革令。幕府、異国舟打ち払い礼を廃止し、薪水食料給与令を制定。 1845：長崎に英艦が入港し、測量と薪水を要求。 1851：島津斉彬、薩摩藩主となる。 1853：アメリカのペリーが浦賀に來航。 ：日米和親条約 1854：ロシアのプチャーチンが長崎に來航。 ：日露和親条約	1804：フランス、ナポレオン皇帝即位、ナポレオン法典の公布。 1819：イギリス、シンガポールを占領。 1823：アメリカ、モンロー宣言。 1830：フランス、7月革命。ベルギー、独立宣言。 1837：イギリス、ビクトリア女王即位。 1840：清、イギリス間のアヘン戦争始まる。 1842：清がイギリスと南京条約を締結し、香港を割譲。 1846：アメリカ東インド艦隊が浦賀に來航し、国交を求めるが、幕府は拒否。 1848：フランスで二月革命、ドイツで三月革命。 ：アメリカでゴールドラッシュ 1853：クリミア戦争勃発。
1828 文政 10	12月7日、鹿児島城下の下加治屋町山之口馬場で、父吉兵衛九郎隆盛、母満佐（マサ）の長男として生まれる。幼名小吉（こきち）。		
1833 天保 4	6歳。松本各覚兵衛について儒学を学び始める。 次弟吉二郎生まれる。		
1839 天保 10	12歳。友人と争い、右肘を負傷。以後、武術ように学問に励むようになる。		
1843 天保 14	16歳。三弟信吾（後の西郷従道）生まれる。		
1844 弘化元	17歳。藩の郡方書役助となり、吉之助と称す。		
1847 弘化 4	20歳。四弟小兵衛生まれる。このころ下加屋町郷中の二才頭（にせがしら）となる。		
1850 嘉永 3	23歳。陽明学を伊藤茂右衛門に、禅学を無参禅師に学ぶ。 父吉兵衛が御用人を務めていた赤山鞠負（ゆきえ）お由羅騒動に連座したとして責めを負い切腹（享年28歳）。		
1852 嘉永 5	25歳。伊集院兼寛の姉と結婚。 父吉兵衛死去。亡父の跡目を相続。母マサ死去。		
1854 安政元	27歳。中小姓となり、藩主島津斉彬に従って江戸に上る。		

編集後記

北海道南洲会機関紙「克己」創刊号をお届けします。暗中模索の中、試行錯誤を重ねて作成してみました。文中の誤り等については、ご指摘ください。

また、掲載記事、レイアウト等についてもご意見やアイデアをいただければ幸いです。南洲翁遺訓は、各条について、毎回掲載していく予定であり、年表についても回を追うごとに増やしていきたいと考えています。紙面の充実を図るため、会員諸氏の投稿をお待ちしています。

文責：北海道南洲会副会長 高木良一